宇治市の教育だより

第87号

発行　宇治市教育委員会
〒611－8501
京都府宇治市
宇治琵琶33番地
TEL（0774）21－1879
https://www.city.uji.kyoto.jp/
編集　学校教育課内
「学校教育広報」
編集委員会

GIGAスクール構想実現にむけて

・子どもたちに1人1台タブレット端末を貸与
・学校の高速大容量ネット環境を整備

子どもたち1人ひとりに個別最適化され、資質･能力を一層確実に育成できる教育ICT環境の実現

これまでの教育実践 × ICT

学習活動の一層の充実

準備と活用を進めています

使用するタブレット

今年度3学期から、市立小中学校全児童生徒に1台ずつ貸与（卒業まで使用）

文字入力に慣れるためにキーボードもついています。

端末画面を映す機器

大型提示装置を使用することで、教師や児童生徒の端末の画面を全員で共有することもできます。授業での意見交流や発表のツールとして活用していきます。

学習支援ツール

漢字練習や計算ドリルを、個人のペースに合わせて学習し、苦手な問題は繰り返し学習できます。

自分の考えなどを伝えるため、写真撮影･文字入力･手書きなどができるカードを作成し、上の写真のように全体で共有できます。また、下の写真のように、カードをつなぎ合わせ、紙芝居のように発表（プレゼンテーション）することもできます。

研修の様子

各小中学校の代表者に研修を実施

校内研修により、授業での活用イメージを共有

どんどん使って、使い方に慣れよう。大事に使ってね。

宇治市宣伝大使
ちはや姫

京都府教育委員会指定　平成31年度(令和元年度)～令和3年度「未来の担い手育成プログラム研究校」

宇治黄檗学園 黄檗中学校

宇治黄檗学園は開校9年目の施設一体型小中一貫校です。

異学年、異校種交流が日々自然な形で行われ、児童生徒は素直で優しく、9年間同一集団で学校生活を送るため、相互の理解が進み、児童生徒の仲もとても良く、中学進学時に不安を感じる児童の割合が少ないといった特徴が見られます。

平成27～29年度は、文部科学省の指定を受けて小中学校で「外国語教育」の研究に取り組み、現在も継続して「英語を用いて表現する力」を育んでいます。

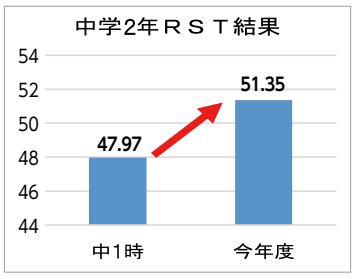
そして、昨年度からは、京都府教育委員会指定「未来の担い手育成プログラム研究校」として、「課題解決型学習（PBL）を通して、認知能力、非認知能力を一体的に育成する」取組を進めています。「課題解決型学習」では、企業や生徒が設定した課題の解決にチームで挑み、その解決策を提案します。

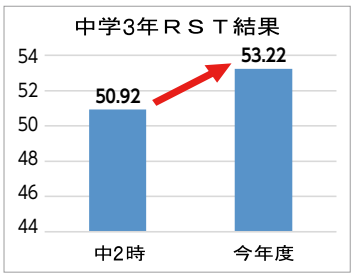
英語でプレゼン

英語４技能テストの実施

基礎的な読解力・論理的思考力の育成

リーディングスキルテスト（RST）を実施し、短い日本語を読んでその意味が正しく論理的に理解できるかを測定しています。RSTの結果が良いほど、他のテストの結果も良い傾向が見られ、結果を経年比較することで、認知能力の伸びを把握できると考えています。





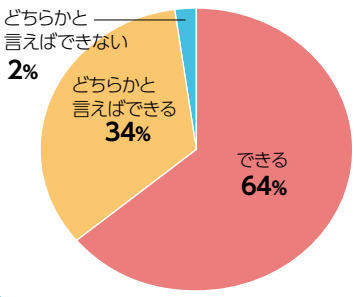
（全国の中1～中3生徒を母集団とする結果の偏差値）

ICT活用能力の向上 〈中3生徒への質問紙調査結果〉

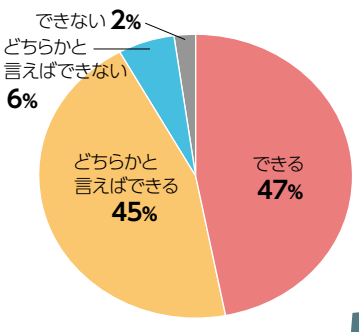
◆授業でのコンピュータの使用頻度

【令和元年度】「ほぼ毎日」「週1回以上」が 8% → 【令和2年度】76%

◆コンピュータを活用した情報収集



◆コンピュータを活用したプレゼンのための視覚資料作成



未来に向かって育みたい力

- 語彙力、基礎的な読解力・論理的思考力
- 知識を体系的に理解し、考え、表現する力
- 対話や協働を通じて、「新しい答え」や「納得解」を生み出そうとする力

課題解決型学習 Project Based Learning 学びをプロジェクト化

「正解のない問い」に答える

世界中に日本茶を普及させるにはどうすればよいか【中2総合（宇治学）】
（株）祇園辻利と連携

『未来の宇治創造プロジェクト』観光客を増やすにはどうすればよいか【中2総合（宇治学）】

調べる → 考える → まとめる → 深める → 伝える

課題例

オセアニア州は今後どの地域との結びつきを強めるか【中1社会】
宇治市を災害に強いまちにするには【中1総合（宇治学）】
和食の良さを広げるには【中2家庭】
人に羽は生やせるか【中3理科】
宇治市への提言【中3総合（宇治学）】

個別の学び

協働した学び

各教科の指導においても、単元の課題を設定し、単元のまとまりごとにテストを実施しています。

学力向上の指標となる質問に肯定的に答える生徒の割合の増加

〈中3生徒への質問紙調査結果〉

	【令和元年度】	【令和2年度】
◆自分の考えが伝わるよう工夫して発表している。	54%	81%
◆地域の自然や歴史に関心がある。	34%	68%
◆地域や社会をよくするために何をすべきか考える。	27%	69%
◆学ぶことや働くことの意味について考えている。	59%	73%
◆学校で取り組んでいることと自分の将来とのつながりを考えている。	57%	72%
◆家で計画を立てて勉強している。	42%	65%

アサギマダラ大作戦 ～蝶の不思議に迫る～　笠取小学校

笠取小学校は宇治市北東部の山間地にあり、入学時に限り、校区外の児童の入学を一定の条件下に認める京都府初の「特認入学制度」のある山城地方で唯一のへき地校です。今年度は全校児童20名で様々な取組を行っています。そのなかでも「探究学習」を柱に、表現力・コミュニケーション能力や、「不思議や疑問」を、既知の学習内容や自分なりの推論、友だちとの対話などを通して解決し、理解を深め創造力を高めることを目指しています。

アサギマダラの捕獲を見守る児童たち

捕獲したアサギマダラ

「アサギマダラ大作戦」もその「探究学習」の1つです。渡り鳥のような蝶「アサギマダラ」は、2000キロを超える旅をすることもあるそうですが、まだまだ謎の多い蝶です。その謎を解くための手段の1つ、マーキングの仕方を「アサギマダラの会」から学んだ子どもたち。アサギマダラが好む花「フジバカマ」を地域の方にも協力していただき、昨年度末に植え、今秋、無事に花が咲きました。あとはアサギマダラが飛来した瞬間を捕らえるだけ。いつくるのか、フジバカマの咲き具合と合わせながら予想し、網を片手に今か今かと日々観察していたところ、ついにやってきました。教わったとおりマーキングをし、蝶を放したのですが、なんと5日後に徳島県在住の方から「再捕獲した」とのご連絡をいただきました。徳島県まで約160キロ。アサギマダラは、遠く離れた場所にいる人たちとの「つながり」をも、もたらしてくれました。「どうやってあんな小さな蝶が海の上をずっと飛び続けたのか」「途中何を食べていたのか」など、子どもたちの疑問がさらに生まれます。また、再捕獲はそうそうされるものではないということも同時に知り、ますます驚きを隠しきれない子どもたち。アサギマダラの観察・マーキングを通して沸き起こった様々な疑問や不思議を、もっと解明していこうという意欲と探究は続きます。

網から出したアサギマダラ

徳島県で再捕獲の知らせを発表する環境委員会

笠取の里にやってきたアサギマダラ

マーキングの様子

宇治市小中一貫教育推進協議会委員による視察から

宇治市小中一貫教育推進協議会は、本市の小中一貫教育の取組を総合的に推進することを目的に学識経験者、保護者代表、地域関係団体代表、学校関係者代表で構成しています。推進協議会では定期的に協議会を開催し、小中一貫教育の取組について協議するほか、各中学校ブロックの取組や合同研修、授業の様子を視察しています。

今回の視察では導入から9年が経過した中で、小中一貫教育の取組が間違いなく前進していることを実感いたしました。先生方によるテーマ別の討議の様子ですが、導入当初の同様の会議では見られなかった小中の先生方が実に溶け合っている感じがして、良い意味で小中の先生の区別がつきませんでした。討議の内容も共通の目的意識を持ったうえで、より具体的な話し合いがなされていたことが印象的でした。

今回の視察では、「新型コロナウイルス感染症」が教育現場に大きな影響をもたらしていることも知らされました。このコロナ禍がいつまで続くのか見通せませんが、そんな中であってもスムーズな小中の連携がとれるような手段の確保が新たな課題として浮上したように思いました。　（委員の感想より）

平成31年度(令和元年度)・令和2年度　京都府学校給食研究会　研究推進委嘱校

小倉小学校

研究テーマ　「やる気・根気・元気のある小倉っ子」
～食育を通して学びに向かう力を育む～

食の大切さを学ぶことで、やる気を持って粘り強く学びに向かう力を育むことを目標に、2年間、京都府学校給食研究会の研究推進委嘱校の指定を受け、給食時間や、食育に関わる掲示、食育の視点を持った授業研究を進めてきました。成果として、給食や日々の食事・食べ物がより身近なものになり、食に興味を持つ児童が増えました。

栄養教諭による三大栄養素の授業風景

【主な取組】

「食育コーナーの充実」(お茶飲み場)
各学年で取り組んだ食に関する学習の足跡を掲示し紹介しました。

「給食時間」
校内放送により給食委員会や栄養教諭から、その日の献立や、献立にまつわるエピソードなどを毎日伝えました。

食育コーナーの様子

平成30年度～令和2年度　京都府小学校教育研究会　研究協力校

道徳研究大会（令和3年1月15日開催）　北槇島小学校

研究テーマ　「つながる心をはぐくみ、共に生きる児童の育成」
～地域を愛し、人を愛し、自分を高めることができる道徳教育～

学習指導要領の改訂により、教科化となった「特別の教科道徳」の公開授業と視聴覚機器を使い、一斉に視聴する全校道徳「つながりタイム」の参観、および研究成果を発表する全体会を実施しました。

公開授業

3年間の研究で「対話」を意識した授業を目指し、道徳の授業づくりをしてきました。成果として、自分の考えや思いを自分のことばで話すことができる児童が増え、他の教科でも自信を持って発言する児童が見られるようになってきました。

つながりタイム

今年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止対策として大会は規模縮小となり、参加人数は限られましたが、実践交流のよい機会となりました。

シリーズコラム　子どもの心と育ちを考える

第3回　一人でいることの大切さ

2020年度も終わりに近づき、学校では新しい学年の準備が続いています。子どもたちも、進級や進学の時期を迎えて、期待と不安でいっぱいではないでしょうか。

さて、この一年を振り返りますと、どうしても、コロナ禍の影響で生活が大きく変わったり、制限されたりしたことが思い起こされます。昨年度の3月から5月までの3か月間は、小学校から高校までのほとんどすべての学校が休校になりました。この間、子どもたちは、かなり多くの時間帯を自宅で過ごすことになりました。この、「自宅で過ごす」という生活様式は、多くの場合は、かなりストレスの多い生活だったのではないかと思います。自由に出歩くことができずに閉じ込められている中で、人に会うこともままならない生活だったわけですから。

ところが一方で、この時期のことについて、自分を振り返ってみたり、他の方々の体験を聞いてみたりしますと、ストレスも多かったですが、案外「意味のある生活になった」と感じることもそれなりにあったようです。いつものあわただしさが減って「じっとしている時間」を持つことで、これまでのことを振り返ったり、これから先のことを考えてみたりということができた人もおられるようです。また、「人に会わない」ということは寂しくもありますが、「一人で自分のことを考える時間を持てた」という面もあったかもしれません。

この「一人で自分のことを考える」というのは、小学校高学年から始まる「思春期」と呼ばれる時期の大切な仕事です。そして、一人でいることと、人と関わりながら過ごすことと、その二つの間を、自分にとってほどよいペースで行ったり来たりしながら生活することは思春期を過ごす上で、大切な心のバランスを生み出します。ですが、今の子どもたちの暮らしの中では、「一人でいること」は、なんだか悪いことのように思われてしまいがちです。「ぼっち」と仲間から見られるということは、思春期の子どもたちにとって、なんだかとても大変なことのようです。また、周りの大人たちも、「一人でいることはよくないことだ」というメッセージを子どもたちに強く伝えてしまっているように思います。一人で立ち止まって考えることの大切さも、もう一度見直してみてもよいのではないでしょうか。

コロナ禍の中、「ステイホーム」は、ストレスが多く辛いことではありました。しかし、ニュートンが万有引力の法則などの着想を得たのは、ヨーロッパを襲った疫病のため、都会の大学を離れて自宅で過ごさざるを得なかった時だったそうです。また、昨年8月には将棋の藤井聡太八段が2冠を達成しましたが、「コロナ禍で対局が減る中で、自分の将棋を見直した」と語っておられました。「動きを止めること」や「一人でいること」の意義も、案外大きいようです。「ステイホーム」の持つポジティブな側面にも、子どもたちの育ちを考える中で、目を向けてみたいものです。

（スクールカウンセラー　K・M）

小・中学生の皆さん、保護者の皆さん
電話でもメールでも　お気軽にご相談ください

「ふれあい教育相談」

メールアドレス用QRコード

電話番号 0774-39-9179（サンキュー クイナク）　平日の午後１時から５時まで　メールアドレス　k-soudan@city.uji.kyoto.jp